

## 生死出ずべきみち

和田 稠

一

皆さん、こんにちは。今年も、どうやらおいのちをいただいて、この大地の会に参加することができました。身体というものは正直なものでございましてね、毎日毎日、新しい経験をしておる最中で、全く毎日が初体験みたいなものですね。それで、その今日までいのちがあったということが、本当に不思議だと思うのです。自分でもびっくりしているのです。ちょっと、あまり長持ちしすぎたなあという思いがしてですね。なんていいますか、一期一会という言葉がございしますが、なにかそういう言葉が、この頃、本当に身体を通していやでも知らされてくるという、そういう感じがございましてですね。もう来年はおろか、まだ明日までは生きておるつもりでおるのですけれども、来年はおろか来月までも保証はできないという、そういうことが事実として感ぜられてまいりまして、そういう中で、こうして皆さん方のお顔を見るのも最後かなあという感じがしております。まことに懐かしいこととございます。

初日から、先生方のお話をお聞きしたり、それから、皆さん方のお声を聞いたりしておりますが、今日、特に最後の宮城先生のお話をお聞きしましてですね、なんともいえない、なんていいますか、生きておるといふことの、何か口に言えないような感動といひますか、そういうものを覚えました。考えてみますと、聞くという、聞いてわかって、それからどうなるという問題ではなくて、聞くということが、もう無上の喜びでですね。私どもも、この私も若いときからご縁がございまして、聴聞の場所に引き出されることがあったのですが、ずうとなにか聞いて、そして、なにか問題が解決して、それからどうなるという、そういうことばかり考えておりましたけれども、どうもそうでないらしいですね。聞くということが、もう無上の喜びである。まあ、親鸞聖人が、浄土真宗ということで、いろんなことをおっしゃっていらっしゃいます。しかし、そのことは全部、聞くというところで、すべて成就するという。だから、昔から真宗は聞の一字につきるんだと、こういうふうに習うてきましたけれども。そのことがわかったようでわからんというようなことが、ずっと今日まで続いてきておったわけです。それで、これで何にも言うことがないのです、本当に(笑)。

何も言うことがないのですけれども、この頃どういうわけですか、昨年が戦後五十年という年で、それで方々で戦後五十年に関するいろいろな行事が各地で催されまして、どういう回り合わせか、出て来い出て来いということですね、そういう所へずいぶんまいりました。で、私はだいたいどこへ行くときでも、どういうことがテーマですかと、どういうことが今、皆さん方の課題ですかと、それを聞かせてくださいと、そのお話をする題を皆さんの方からいただくことにしておるのです。ところがこの会はずいぶん、いつでも、あなたが好きなことを言うてくれと、こう言うのです。楽なようで、無責任なようでですね、どうもくつりしないのです、本当は。やっぱりね、問題がはっきり何にもないところへ行って、なに話してもはじまらないということをおもうのです。

で、今回、何が問題なのかということ、ま、察するところはいろいろあるんですけれども、それで、先程、講題をと言われましたので、<生死出ずべきみち>とこういう、これぞ存知のように、『恵信尼消息』の中に出てくる、恵信尼さまが書かれた言葉とございます。こんなことはもう何十年前から聞きもし、そして、わかったつもりでおったんですけれども、実はこれはご存知のように親鸞聖人が一二月二八日にお亡くなりになりまして、そして、月が明けて、一二月一日付けで、越後の恵信尼さまが、覚信尼さまからお父さんがお亡くなりになりましたという、その報告のお手紙に対するご返事として書かれたですね。一二月一日付けで発せられた覚信尼さまからのお手紙が、越後の恵信尼さまのお手許に届いたのは、同じく、二〇日過ぎであったと、ま、こういうところから書き出されまして、そして、皆さん方にいまさら申し上げる必要もないのですけれども、一番先に出てくるのは、なんていいますかね、これうまく言えんのですけどね、親鸞聖人という方がどういうお方であったのかと、生涯を貫いて生きていかれた、その親鸞さまの問題が何であったのかという、言いますならば、その求道の原点ですね、その求道の原点を一番先に打ち出されていらっしゃるわけです。

二〇年間の比叡山の求道の歩みを捨ててですね、ま、捨ててというのは、ちょっとどうかと思いますが、そして、六角堂の参籠を経て法然上人をたずねられた。で、そのことを一番先に書かれましてですね、ご存知の六角堂から法然上人を尋ねられたのは「ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出づべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば」と、ま、こういう言葉です。今あらためて読んでみますと、実に的確ですね、一字も余分な字がない、非常に的確な言葉ですね。で、その親鸞聖人の求道の原点といいますか、そして、その原点が九〇年の生涯を貫いて生きていかれた、そういうお方であります。だから、覚信尼さまがですね、親鸞さまのご臨終の様子に、ちょっとこう不信をいただいたというような記事があったのを、それをですね、その同じお手紙に「されば、御臨終はいかにもわたらせ給え」と。親鸞聖人がまちがいなく往生浄土をなさったということは、いささかも疑いまいらせることはない、こう言っていられしやるわけです。といいますことは、その恵信尼さまご自身がですね、そのこれまた本当にこれ妙なご夫婦ですね、恵信尼さまご自身が、親鸞さまとまったく同じ道を歩み続けられた。で、親鸞さまが亡くなられる時には九〇才ですね、で、九つ違いのご夫婦ですから、八一のおばあちゃんです。その方が、振り返ってみまして、親鸞さまのことが書いてありますけれども、その文面の裏にはですね、親鸞聖人と共に歩んだ自分のことがはっきりと出ておるわけです。

ま、そういうことが、どうして可能であったかということですね。昨日も大河内先生のお話の後で、私がちょっと質問かなにかわかりませんが、この頃、共にということを行いますけれども、共に生きるとかですね、言うならば一つ世界とか、この頃流行っとる言葉ではバラバラのまんまで一緒という、なんかわかったようでわからん言葉ですけども、ともかく、その共にということですね。その「諸々の衆生と共に」と、先程も言いました、一緒に。で、その時には、なんか漠然としておりますけれども、その諸々の衆生と共に、こう自分の口で言いながら、その言葉に会うとですね、何か深いものを感じますね。ところが、現実には決してそうではないですね。何十年連れ添うておる夫と妻も、共にということが本当に言えるのかというと、皆頭を抱え込んでしまわなければいけませんね。この頃、昨日も質問したんですけども、コミュニケーションという、本当に夫と妻、長年連れ添うた二人の間でもですね、コミュニケーションが成り立たない。要するに世界が違う。学校の先生と生徒が、共にというわけにはいかない。まして、両生類とか、爬虫類とかという、そういう生きものと共にとなんて思ったこともないです。ところが、お経を読んでみますと、十方の衆生とこう書いてありますが、そんなことをなんとも思わずに読んでおるんですね。それで、真宗のお話を聞き、聴聞をしていくと、やがて十方の衆生と共にという世界が開かれてくるんだ、なんて思っておりますけれども、甘いものです。なにかその、そこに私どもの大きな問題があると思うのです。

こういうことを言いますと、どうも私の話は切りがなくなって、自分でもね、これ歳のせいかと思うんですけども、話とるとね、話の出たところを忘れてしまうのですよね（笑）。枝から枝へ話が横道して、散歩しまして、私だけかと思うたら、私の会った先生方の中でもですね、あつ、わしは今、何を話とったんかなあという、そういう先生もございました。話の脈絡が付かんように、また話が横道へいきましたね。脈絡が付かんです。曾我先生なんかは、あつ、今日は頭が悪いからやめますとか言うて、けったいなことを言う人やなあ、ご信心の問題と頭の悪いのと、どう関係するのかなあと、愚かなことを考えておりましたけどもですね、どうもそういうことが他人事でないようなことになってまいりました。それで、うまくお話ができません。極めて断片的なことになろうと思うのですけれども。

先の話に戻しまして、この頃、あちらこちらへ行って題を出してくださいと、こう言いますとですね、これは私に向いたような題をと、向こうが配慮なさるのかどうか知りませんが、例えば、現代と宗教とか、現代と真宗とかですね、なんかそういう似たような題が、まあ、しょっちゅう出てくるのです。そして、そういう現代という時代の真っ直中において、真宗の救いとは何か、本当の救いとは何かと、こういう問題ばかりなのです。課題は、ほとんどが。これも妙な話でしてですね、何十年聞法をし、何十年親鸞聖人の教えに親しんできておるがですね、その親鸞聖人が浄土真宗と言われたことが、もうひとつはっきりしないと。本当の救い、念仏しながら本当の救いにあずかっておるといふ実感がない。そういうことを、まあ、そういう表現でおっしゃるんだらうと思うのです。これはもう、一か所や二か所ではないので

すね。もう、あちらこちらで、そういう題が出てくるのです。ということは、私たちの真宗門徒の信心というものが、いわゆる現代という時代社会の中で、逆に問われてきておるといふ共通のものがあるんだと思うのです。普通、常識的に考えますと、時代社会を問うものが宗教だと。宗教がその時代を問い、社会を問い、人間を問うんだと、こういうふうに思っておりますけれども、実は我々の長年聴聞をしてですね、そして獲得したと思っておる信心が、現実の時代社会によって逆に問われてくる、そうすると途端にわからなくなるということでないかなあということを思うのです。で、そういうことを考えていきますと、私の妄念妄想がもうむらむらむらむらと起きてきましてですね、これはまあ、もう妄念妄想というよりほかしようがないです。そうすると、具体的にそれを一応、考えてみますとですね、そこに我々人間が歩んできたところの時代、そしてつくりあげてきたところの時代社会、それを近代の我々の普通の教養的な常識に当てはめると、それは近代と現代、まさにこれは世界的な、全人類的な課題でございます。現代とは何か、これも各地で申しましたので、詳しく申しませんが、私だけの了解かも知りませんが、近代近代と言っとるけれども、現代と言っとるけれども、特に日本における我々にとっては近代というものは、まだある意味で、始まってから戦後五〇年しか経ってないと。現代はまだ来ていないと、ま、そういう言い方になるわけです。学校で習うと、明治以後、日本は近代化の時期に入ったと、こういつて習っておりますけれども、実は明治から敗戦までは、決して近代ではない。いわゆる、ヨーロッパの概念で考えたら、近代的な要素はほとんどないと言ってもいいです。そして、ようやく我々の生活全体が、ひとつの近代文化といいますか、近代の生活といいますか、ものの考え方、近代精神といいますか、そういうことが始まったのが敗戦以後でございます。したがって、日本は近代になってから、ま、それも曲りなりにです、曲りなりに近代になってから、わずか五〇年しか、半世紀しか経っていない。しかし、その時に同時に、まさにその四世紀か五世紀か、ずっと続けてきたヨーロッパの近代がですね、まさに終焉を迎えようとしておる。いわゆる現代が殺到してきておる。で、客観的には日本もその波に洗われておるといふ、ま、簡単にいえばそういう図式で言えるのではないかと思うのです。

で、その中で、私どもが現に生きておる。現に生きておるのです。生きておるといふことは、我々の衣食住の生活形態から、我々のものの考え方、意識の在り方、ですね、あらゆるものが、そういう中で我々が考えておるといふことです。まあ、ここで、これは私だけが言わなくてもよろしいんですけども、その近代がまさに終わろうとしておる、世の終り、ま、世の終りですね、世の終りが確実に迫ってきておる。で、その中で私たちが親鸞聖人の教えを聞いておるといふことと、そのような日常を生きておる私の存在自体ですね、それがいったい、どういうひとつの緊張関係を持っておるのか、おらんのかということが、非常に大きな、ま、私自身のずっと一貫した問題でございます。要するに、今までのいわゆる近代、ヨーロッパでいいますと、四世紀、五世紀、こう続いてきて、それが我々の日常意識として定着して、そして誰もそれを疑わない。自明のこととしてやってきた、それがですね、現代の足元から崩壊しておるといふか、まったくその今までのあらゆるものの考え方、行動の仕方、生活、ま、全体が人類が未だかつて経験しなかったようなですね、異常事態に突入したと、まあ、そういうふうに言ったらどうかなと思うのですね。

そうしますというと、例えば、宗教ということもですね、私どもが了解しておったような宗教というものは、まったく存在の基盤をなくしてしまっておるのでないかと。そういう中で真宗というのはいったいなんだということが、あらためて私どもの、これは単なる宗教課題というよりもですね、現代に生きておる我々の存在自体の課題であると、こういう意味をもってきておると思います。

## 二

ところで、こういうことを言っておりますと、極めて一般的なジャーナリズムの論調みたいになってしまいますが、簡単に言いますと、近代というのは、大河内先生の講義にもありましたようにですね、永遠なる理想をめざして、そして人間が奮励努力して、そして人間の理性の力によって理想的な世界を実現していく。そういう無限なる努力、そういうひとつの人間の歩み。もっと言いますと、人間の能力を無限に信頼し

ておるといふ、そして、その結果が非常に皮肉なことにですね、その人間そのものが不在のような状況をもたらしてしまった、ということですね。ただひとつ言えることは、今まで近代は人間が自分の能力に無限の信頼を抱いて、そして、好ましくない状況を変革し改善し、それをよりよきものにして、そして、その理想的な社会を地上に実現しようと。これはもう、資本主義も、マルキシズムも一緒にございます。ま、具体的には、そういう歴史を辿ってきたと。ところが、その結果はですね、大変なことになって、今始まってきておるといふわけで、これも皆さんご存知のことばかりを言うんですけども、その結果がですね、みな挫折してしまいました。私どもの青年のころは、いわゆるマルキシズムというものが、まるで絶対のようにその上に大きな夢を抱いて情熱をかきたててきた、そういう学生時代でございます。ところが、それが惨澹たる情況に今、陥っているとき、結局ですね、その人間が問題だということにまた戻ってきたわけです。

近代というのは、人間というものは極めて自明のものであると。人間がですね。で、その人間が社会を変革し、自然を変革し、さらに政治、教育、すべてを変革し、ついでに人間の意識までも変革していく、ひとつの変革思想でございましょう。ところがですね、その結果生まれてきたところの科学、特に科学と技術、そういうものによって再びその自明であったはずの人間とは何かということを、みんな否でも応でも考えねばならんことになってきたということです。こんなまとまらない話をしとると、時間がたちまちなくなりますけれどもですね。人間とは何かという問題は、古代ギリシャの問題でもありますし、古代インドの問題でもあります。ところが近代になって、人間というものは自明のものになった。ところが、今再びいったい人間とは何かという、古くして新しいその問題がのしかかってきておるわけです。そうしますというと、その人間というものをですね、これは近代が崩壊したといいながら、その人間とは何かという問題を、また近代的な方式に基づいて明らかにしていこうということが、今、真っ最中でございます。

言いますと、それはいわゆる生命科学とか大脳生理学とか、そういうものによって人間とはいったい何かということを対象的に分析し観察しですね、そして、その事実を明らかにしていく。しかも、それが現在の科学と技術によって無限に進められていくという状況でございます。その結果がどういうことになるかというと、ま、僕は極端だと思うんですけども、その道におる人たちには決して極端なことではなくて、近い将来に必ず実現するという確信を持っていらっしゃるらしい。それはスーパー人間を人間の手で作ることができるという、ひとつの考え方ですね。だいたい、二二世紀から二四世紀の期間に、必ずそういう人間を作ることができる。人間とっていいですか、まあ、生命ですね、生命科学です。

それから、まあ、こんなことは皆さんに言うまでもないんですけども、例えば、コンピューターというものができまして、そのコンピューターに人間の神経細胞の単位、ニューロンというそうですけれども、それと人間の脳の構造をコンピューターに入力をしまして、そうしますというと、単に今までのコンピューターのように入力された情報のストックだけではなくてですね、自己学習能力とか判断能力までも行えるコンピューターができてくると。これはもう決して夢ではなくてですね、現実にもうそういう実現の段階まで入ってきておる。そこで、自分で学習能力を持ち、認識し、ものを推論し判断する能力を持ったコンピューター。ま、そうすると、それは何だろうということになります。人工人間といますか。この頃、そういうことを実感するですね。ま、なんていいますか、うまい言葉がないんですけども、そういう人間が出てくるということになりますと、それはまったく異類の世界。そういうことが単なる想像ではなくてですね、現実に出てくるということ。それから、さらに面白いことにはですね、この頃、もう新聞でやいやい言ったりしますが、地球以外の惑星で人間が住める状況を作りだそうということが、いわゆる宇宙科学の重大な問題になっております。今のところ、それがちょっと行き詰まってるのは、その為にはぼうだいな経済力が必要であるということですね。それから、まだそれを実現しなくても、地球の南半球というものが、まだ発展途上国とこう言われまして、そこにまだいくぶん余裕があるということ、そういうことがひとつあって、その発展の速度が思うようにいかないんですけども、むしろそういうふうにするには時間がかかるからですね、なんていいますかね、生命の種を火星に移しかえて、そして、その進化のスピードを速めるように手を加えてやろうと。要するに、そこに新しい人間ができるという、火星人間です。そうすると、それはね、果して人間といえるのかということ、少くとも我々が考えておるような人間ではない。しかし、ともかくそうい

うものができてくる。それは地球人ではなくて、火星人間というものが生まれるだろうと。ま、そこまでいっとるらしいんですね。詳しいことは知りませんが。

そういう状況の中でですね、いったい我々が人間人間とって、こう自明のことにしておけるようなその人間、しかもそれは単なる抽象概念ではなくてですね、この私自身を含めて、そこでいう真の人間とは何かということが、ずっとこの近代の終りあたりから続いて、今おるわけです。人間がそういう状況をどう克服して、そして自由で主体的な存在でありうるかという問題でございますね。そういう人間がですね、非常な進歩と発展を願いながら、実は非常に制約された状況の中でしか生きていけないという、まあ、非常にやっかいな時代がまさに現実化しようとしてきておると。そうすると、その元を尋ねると人間のエゴイズムという、このエゴイズムはまあ、仏教でいえば我執と煩惱という言葉で言えるのですけれども、それは単なる個人の問題ではなくてですね、ひとつの集団的エゴイズムというものが、もっと大きくなると、人類全体がそういう自己の発展を願いながら逆に自己を破壊せしめるような、そういう矛盾を、しかもおそらくこれは終わることのない、無限にその道を進まずにはおれないという状況の中にあると。そうしますというと、そういう中で本当に独立して自由なる人間というのは、そのような自己、ならびに社会のエゴイズムにさえ所有されないような自己というものを確立しなければならないと、こういうことになるというわけですね。

その問題が、今、否でも応でも僕らの全人類の上の共通の課題として迫ってきておる。で、こういう問題をですね、文化の問題として考えるのか、科学の問題として考えるのか、生命科学の問題として考えるのか、いろいろありますけれども、我々がこう心得てきたといえますか、考えてきた、それこそが宗教問題である、宗教課題なんだと。そうすると、宗教課題というものは、特殊ななにか問題ではなくてですね、現在、私どもが直面し、しかもそれが進行し続けている全ての問題が、結局、人間とは何かというひとつの共通の課題。それを特別取り上げて宗教課題という、かえって誤解が起こるような、そういうことであろうと思うのです。

で、そのことでですね、僕はもう妙なことばかり関心がありまして、だいたいこういうような場所で講義をするというようなことは、こんな私的関心のことを申してはならんということを言われております。法の真実を説かなければならないのであって、私はこう感じますとか思いますとか、そんなことを言うのはもう間違いだというふうに言われてはいますが、どうもそういう課題がですね、こうなんか区切りがつかないような状況に、まあ、なっておると思うのです。

### 三

最近、皆さん方もご存知か知りませんが、これも私の個人的関心ですけれどもですね、そういう課題を生涯、自己の課題として追求し続けておる一人の老人がおります。今年、八五才でございますから、私よりもまだ少し年輩でございます。そして、それを終極的な課題としてですね、これは名前を言えばご存知でしょうけれども、埴谷雄高という、戦中から戦後、おおかた生き抜いて、そして四半世紀の長い間にわたって『死霊』という小説を、今も執筆中でございます。その方、私は全部とても読む時間も能力もありませんので、わかりませんが、その方の言葉を聞きますと、この人は別に、特別な宗教というものを認めておりませんし、自分がなにか宗教というものを位置付けようということもないらしいんですけれども。

どういうことを言っとるかと言いますとですね、僕は自分が生まれてきた意味をはっきりさせようとしていまして。僕自身の問題、これは一生の課題がここにある、こういう言葉で言っとります。まさに、僕らがこういう場所で言ってるようなことと同じことを言っとるんですね。しかも、彼はそれを特別に宗教問題だとは思っていませんですね。私自身は生と生存の意味をどうにか考えるために生きておるわけであって、子どもを作るために生きておるのではない。しかし、一生かかってもおそらくわからないでしょう。それは存在の革命ということが、ほとんど不可能だということを知りながら、そのことに関わり続けずにはおれないものがあると、こういうことを言っとるわけですね。ここでなんかこう埴谷雄高さんの紹介をするようなことになってしまいましたけれども、皆さんお読みになっておる方もあるかも知れませんが、ずーっ

と何十年来、彼のいつておるひとつのテーマは<自動律の不快>という、これもわかりにくい言葉でございますけれどもですね。私は本当の思想というのは言葉を創る、創るにちがいないと思うんです。今まであった言葉を解釈したり、分析したりすることではなくて、本当の思想というのは言葉を創る、創らねばおれないということがきつとあるんだと思うんです。

それで、埴谷雄高氏はですね、これを<自動律の不快>という、まったく我々の普通の感覚ではわからない言葉ですけども、よくよくそれを読んでみますとですね、それは私は私であると、これ自明のことです。私は私以外のなにものでもない。私は私であるという場合に、その私はという私と、私であるという私は、果たして一緒かという。ま、これひとつのたとえですけどね、具体的な。我々はそのことに対して全然、疑問を感じない。感じないけれども、実は、私はという私と、私であるという私は、必ずしも一つではない。言葉の上から言いますと、主語と述語です。そういう形であられる私というものは、一体何だと。本当の私とは何か、こういうことが彼の問題です。それでですね、そのことがわからない、本当の自分がわからない、そのことを不快と。こういうわからんままでわかったつもりになっておる、しかし、わかったつもりになっておるけれども、不快の念、避けることができないと、こういう意味なんですね。これ、まあ彼の独特の言葉ですから。子どもの問いはなぜという、これはなぜかという子どもの問いに、大人はほとんど答えることができない。大人が答えるのは、どうしたらよいかということについてのみ言う、と。これは我々も一緒ですね。真宗に生きる者は今の時代をどう生きていくか。どう教団を運営するか。真宗に生きておる者は、この現実の課題にどう対応するか。例えば、現実の問題としますというと、私どものいささか関わっておる問題では、例えば反原発の問題だとか、平和運動だとか、沖縄の問題とか、差別の問題とか、いろいろあります。それで真宗に生きる者は、こういう現実の課題にどうしたらよいのかという問いがさかんに出てきます。いかにすればよいか、だいたい宗教の問題は常にそういう相談が多いんですね。全部、そういう相談です。今、我はいかに生きるべきか。ところが、なぜそうなっておるのかということについては自明のことになっておる。人間というものを。そのことが実はなにか我々の魂が満たされない、ですね、それを彼は<自動律の不快>という言葉で言うわけです。それを、もう少し具体的に言いますとですね、ここで、その、彼もひとつの矛盾があるのではないかなあと思うんですけれども。我々の生命が生きておる、その在り方そのものが満たされない状態であるということ、どこかで感じておる、その感じを彼は不快という、落ち着けないということでしょうなあ。居心地が悪いといえますか。生きておる、そのことが居心地が悪いといつか、なんかそういうことを不快という言葉で言っておるんだらうと思うのです。で、それをもう少し具体的に言いますと、いかにも彼らしい言い方で言っておるんですけども、なぜそうなるのかと言いますと、人間のDNA、いわゆる染色体の問題ですね、生命科学で明らかにしておる、人間のDNAは魂の渴望が刻み込まれておるから、人間はいつまでも魂の渴望に悩まされ続けるのだと。そうなるんだと。だから、人間に生まれたということがですね、苦悩せずにはおれない。ちゃんと存在しながら、その存在に充足し落ち着くことができない。それは深い深い魂の渴望が満たされないからだ、ま、そういう言い方をしとるんです。これを真宗的な言葉でいうと、まったく同じような表現を別の言葉で言えると思うんです。今、そういう時間がございませぬから、やりませぬけれども。

ところが、これをですね、そういうひとつの重大な問題を、ひとつの不快感ですからね、じゃあ、その不快感をどうしてなくしたらよいかと。また技術論になります。これは非常に重大な問題でございましてですね。普通、宗教というものは、我々の苦悩を解決し、苦悩に答える、で、苦悩を除く。『観無量寿経』に「除苦悩法」という言葉が出てきますが、我々のあらゆる苦悩を除くんだと、それが宗教だと。こういうふう generally、特に日本では日本人の宗教心ではそういうふう to 思っております。ところがご存知のように、韋提希夫人がですね、この世は地獄・餓鬼・畜生に満ち満ちております、私はこのような所におることはできません、我に「憂悩なき処」を教えたまへと、こう言うんですね。で、お釈迦さまは黙っておって答えるんですね。面白いもんですね、お経というものは。そして、そのかわりに多くの国々を、諸仏の国々をみせられます。そうすると、韋提希の方はですね、私の生まれたいのはこの阿弥陀の浄土であります、こういうことを言うわけです。そうすると、実は宗教というのはですね、苦悩を除くようなものではないのだと、こうい

うことになってきますですね。

もし苦悩を除くということが人間の幸福につながり、人間の、なんていいますかね、望ましい存在の在り方につながるということであるならば、これは極めて簡単なんです。それは現在の科学技術を総動員すれば、苦悩、まあ、苦悩とっていいか、苦痛とっていいかですね、まあ、これは本質的には一緒だとは言えませんが、密接につながっております。そうしますと、現在、僕らの全科学技術をあげて、いかに生きる苦痛をなくするかということに全力をあげておるんですね。そして、ある程度そのことがどんどん可能になっております。老・病・死とこう言われるけれども、それが全部、科学技術によって解決されようとしております。例えば、死の苦痛と、この頃流行っている安楽死の問題でございます。死の苦痛をどうして逃れるのかと。私等の子どもの頃は、死という言葉だけを聞くと身震いがした。断末魔の苦痛がやってくると言われるとですね、どんなひどい苦しみをしなければいかんのか。この頃は、そういうことをしなくてもよろしい。手慣れたお医者さんに任せておけば、その苦痛の程度に応じて適当に麻薬を操作して、そして、眠るように静かに終わらせてくれます。そうすると、死の苦痛さえから、僕等は解放された。出産の苦痛からも解放されました、ですね。年老いるということの苦痛からも、いかにして解放するかということです。だから、苦痛からの解放、それで人間は満足するののかということですね。現在の文化はどうも、そうですね、不便なこと、不快なこと、苦しいことは全部排除していく、排除して、そしてよい世界を実現しようというんです。

#### 四

これはね、変な話ですけど、私は少年時代のとき、死ぬことを考えると夜眠れませんでした。明日の朝まで命があるかなあとすると不安で不安でですね、眠ることが怖くて、そうして眠ることができなかった。それ程、死が怖かったんです。この頃ですね、あんまり怖くなくなりましたよ。それは長年の聴聞の結果、心境が開けてきた（大笑）と、そう思いたいんですけどもね、どうもそうでない。それはなぜかということ、年取ったというだけです。これは簡単にいいますとね、これは皆さん方もこの年まで生きていらっしゃるとだいたいわかります。なぜかと言いますとね、僕らは息が止まるときに、ある時に死がどっと押し寄せてくるみたいに、普通思っ取るんです。ところが、そうではないんですね。僕なんか、もう口は四〇年前か五〇年前に死んでしまっ取るんです。もう総入歯ですから。耳ももう二〇年程前から死んどりますしですね。目ももう半分死んどりますし、今度は足がだいぶんあやしくなってきましたし。死というのは徐々に確実に毎日、死んどるんですよ。これこの頃の証明、証明されます。だから、死の限界をどこで設定するかということが脳死の問題になっ取るんです。肉体は死んだと、こう言っておるけれども、爪や髪は伸びるんです。まだ生きとるんです。ですからね、死ぬということは、ある時、一時に来るのでなくて、徐々にもう死につつつある。生きつつあるということは、同時に死につつつあるということ。そういうことが、もう長年生きておりますと否でもわかります。そうすると、そう怖いことなくなるんですね。現に死につつつあるんですから。別に特異な体験をするわけではありません。

それから、生きるということに喜びも張り合いもだんだんなくなるんです、長生きしとると。そうすると、二つが相乗効果を現しましてですね、（笑）で、その死ぬことも生きることもたいしたことではなくなる。で、私は、これ他でも言ったことですけどね、こないだ寝とったら、ふっと出て、へたな歌を作りました。どういう歌かということ、喜びと悲しみ、悲しみと喜び、「悲喜ともに 心さわがずなりし日は 死になじみしか 生に倦みしか」いい歌でしょう（笑）。死にだんだん慣らされてきておるから、あらためて死というものを驚くことがなくなったと。だから、喜びがあっても、若い時のように躍り上がって喜ぶこともない。絶望とって見たところで、身を投げるほどの絶望もない。で、生きることが、だいたいこう毎日自分の身体を管理するだけが、相当やっかいで重くなります。そうしますと、一方においてですね、死に徐々に慣らされ、一方において生きる感動がなくなる。だから、別に心さわぐことはない。「悲喜ともに 心さわがずなりし日は 死になじみしか 生に倦みしか」。

しかし、これは別に悟りでもなんでもありません。それは仏教の苦悩を除くという、そういうこととどうつながるのかという問題ですね。これはだいぶん年を取って聴聞を続けてきたから、だから生死が問題でないような心境が開かれてきたんだと、とても思えません。そうすると、いったい宗教の問題というのは何だと。そうするとそこに、これは今朝の宮城先生のご講義の中にもあったようにですね、本当の純粹意志といえますか、そういうものが我々に呼びかけ、我々を目覚めさせ、我々を起ちあがらせ、もうやむにやまれざるものとしてはたらきかけてくる、そういうひとつの生き方。単なる苦痛がなくなることではないのだと、こういうことだと思ふのですね。

で、また埴谷雄高の言葉ですが、「窮極はどうかという問いを發して、その窮極を求める。僕はそのために社会革命を」、これは一時、共産主義に身を置いた人です。「社会革命を考え、そしてその次ぎには存在の革命へと移っていったけれども、そして両方ともそのことが実現しないということも、身をもってわかったけれども、しかし、革命そのものからは離れられない」と。これが近代精神ですね、僕からいうと近代精神ですよ。僕らは仏法を聞いて自己革命をしようと思っておりますかね。仏法を聞いてですね。革命ということからは離れられない。「困ったことには、生と存在の革命ということになれば、これは無限にまで追いついて、一生やってもやり遂げられはしませんね、と。しかし、そのことが実現できないということがわかりながら、せめてその端の端でもつかまればいいと思っておると。窮極の革命の端の端でもつかもうと頑張っておる。そして、そのことが死を弔わねばならんという、ひとつの責任となる。」こういうことを言っておるのです。